



EAAFP

東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ

オンラインニュースレター No. 11
2013年9月号

パートナーシップニュース

- EAAFP MoP7（第7回パートナー会議） アラスカで開催
- 東アジア・オーストラリア地域フライウェイ沿いの渡り性の北極圏繁殖鳥類保全のための新しい協力
- 広報・教育・普及啓発に関するEAAFP-WLI（湿地リンクインターナショナル）合同ニュースレター刊行
- マレーシア、Bako Buntal 湾のEAAFPフライウェイサイトネットワークへの登録を祝う
- 日本、荒尾干潟をEAAFPフライウェイネットワークサイトに登録
- EAAFPヘラシギ 特別委員会 ニュースレター第10号 2013年8月刊行
- 消えていなくなる？：アカハジロ絶滅寸前

関連ニュース

- 貴重な光景、標識を付けたヘラシギの渡りの様子
 - ヘラシギ、保全に関わる人々により数が回復
 - ヘラシギ救済アニメに500人の子供が参加
 - Guwayi（ワウル語のオオソリハシシギの名前）シギ・チドリ類、科学と文化を通じて追跡
 - 北極圏生物多様性アセスメントー渡り性の鳥類
 - ASEAN公園管理者、Tagaytay（フィリピン）にて生物多様性会議開催
 - Birds Korea Birdathon 2013年5月11～12日開催
-

■ EAAFP MoP7 (パートナー会議) アラスカで開催



MoP7 参加者 アラスカ、アンカレッジ © EAAFP

東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ(EAAFP) の第7回パートナー会議が2013年6月10日～14日、アメリカ、アラスカのアンカレッジおよびセワードにてアメリカ魚類野生動物保護局主催により、開催されました。

新加入の3つのパートナーが歓迎されました。: マレーシア政府、野生生物保護協会、および北極圏植物相・動物相保存事務局 (CAFF)
これで現在のパートナー [Partners](#) の数は15の国の政府を含めて30に達しました。

協力のための決議はアンカレッジで、CAFF および EAAFP 間で調印され、北極圏で繁殖する渡り性水鳥の保全の協を誓いました(詳細はこちらにより [link](#))。また、EAAFP フライウェイサイトネットワークには5つの新しい湿地、マレーシア (Bako Buntal 湾)、オーストラリア (Roebuck 湾および80-mile 海岸)、アメリカ (ユーコンデルタ [Yukon Delta](#))、及び日本 (荒尾干潟) が加えられました。

会合の中で、中国は新しく EAAFP の議長に、またアメリカは副議長に選任されました。技術的な討論は、ネットワークサイト同様フライウェイ内のシギ・チドリ類、海鳥の種を優先し中心に進められました。最近のアカハジロ(詳細はこちら [learn more](#)) の急激な減少に焦点を当てた新しい作業部会が結成され、黄海における潮間の生息地の保全を進める計画も承認されました。ヘラシギ特別委員会は報告会の中で、ヘラシギの旅(渡り)のビデオを上映しました。[23/07/13]

[\[MoP7 documents\]](#) MOP7 の文書

[\[Link to article\]](#) 記事へのリンク

■ 東アジア・オーストラリア地域フライウェイ沿いの渡り性の北極圏繁殖鳥類保全のための新しい協力

(2013年6月10日) アラスカ、アンカレッジ：

CAFF (北極圏植物相・動物相保存事務局) [Conservation of Arctic Flora and Fauna \(CAFF\)](#) および EAAFP (東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ) [Partnership for the East Asian-Australasian Flyway \(EAAFP\)](#) では、5千万羽以上の水鳥の生息地である渡りのルート沿いの鳥たちのための、より良い協力関係の推進と保護に向けた決議 [Resolution of Cooperation](#) に調印しました。

東アジア・オーストラリア地域フライウェイは、重要な渡り性水鳥の渡りのルートです。その範囲は、北極圏内のロシアやアラスカから南方の東アジア、東南アジアを横切り、南のオーストラリアやニュージーランドも含めた22カ国に及んでいます。このフライウェイには、IUCNで指定された世界で絶滅の危機に瀕している33種の渡りの中継地が含まれています。

シギ・チドリ類、カモ類、白鳥、ガン、ツルなどの渡り性水鳥は、このフライウェイを世界の個体数の45%と共有しており、そのうちの数種は生息地の変化や破壊等の人間活動に帰因する絶滅の脅威にさらされています。前回の「北極圏報告書 [Arctic Report Card](#)」によれば、ホウロクシギ、オバシギ、コオバシギ、及びオオソリハシシギ等を含めた32種の調査では、北極圏の水鳥の個体群のうち11種が減少していました。科学者らは、残りの21の北極圏種の傾向が明らかになるような、現在や過去の個体群について十分な知見を持っていません。

例えば、切迫した絶滅に直面している非常に危機的状況のヘラシギ等を含めた、最も危機的な北極圏の鳥の種の幾つか残りの個体群は、このフライウェイ内に生息しています。ヘラシギは、ロシアのチュコッカで繁殖し、越冬地である東南アジアへ渡る間に中国の沿岸湿地を通過します。最近刊行された北極圏生物多様性アセスメント [Arctic Biodiversity Assessment](#)

によれば、過去30年にわたりヘラシギの個体数は、6千の繁殖ペアから数百のペアまで劇的に減少しています。また、中継地や越冬地の生息地の喪失に加えて、カスミ網で鳥が捕獲され食糧として地域の市場で売られる、東南アジアの一部における見境のない狩猟が最も深刻な減少の要因とされます。



オオソリハシシギの写真 © Dave Bakewell

アラスカを含めた地域では、カモ類、ガン類、カモメ類、アビ類、ケワタガモ類、及びシギ・チドリ類を含めた少なくとも 29 種が定期的にベーリング海を越えて渡りを行っています。東アジア・オーストラリア地域フライウェイを通じて大部分あるいは全個体群が渡りを行うため、3 つの種が特に注目されています。これにはオオソリハシシギ、ハマシギ、ウズラシギなどが含まれる。「西洋の」オオソリハシシギはアラスカにのみ営巣し、ニュージーランドやオーストラリア東部で越冬する。北方への渡りでは、10 万~15 万羽に達するこれらのシギ類の総個体は、黄海の潮間の生息地を除いて、数週間で中継地を渡ります。彼らの生息地は、前例のない絶え間ないスピードでの変化に直面しています。南方への渡りでは、シギ類はアラスカからノンストップで直接に太平洋を横断し、越冬地へと渡ります。

渡り性の鳥は世界の隅々につながっています。効果的に渡り性の種を保全するには、北極圏と非北極圏の国々との間の国際的な協力が必要とされています。この目的のために、CAFF および EAAFP の目標および行動は互いに補い合っています。

協力の決議 [Resolution of Cooperation](#) は、協力を正式なものとし、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ沿いの渡り性の鳥の種の保全のための知見の構築や共有を行い、周知をし、実現をすることに貢献しています。

書面は、CAFF のアメリカの代表であるアメリカ魚類野生動物保護局主催によるアラスカのアンカレジでの第 7 回 ESSFP 会議で署名し結ばれました。

EAAFP では最適で可能な機会を利用して、現在の状況、傾向、脅威等を含めた北極圏の渡り性の鳥の種の重要性を促進し、また適した場所には CAFF プログラムのデータの普及を促進しようとしています。

CAFF は、周知を広め、渡り性の鳥の種の保全のための支援行動を拡大し、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ沿いの種が立ち向かう挑戦に焦点を当てるような機会を探して行く予定です。CAFF の北極圏生物多様性アセスメント [Arctic Biodiversity Assessment](#)、および極周辺生物多様性モニタリングプログラム [Circumpolar Biodiversity Monitoring Program](#) では、この重要なフライウェイ沿いの渡り性の鳥の種に関する情報の交換を促進していく予定です。

連絡先:

Tom Barry
Executive Secretary, CAFF
tom@caff.is
+354 861 9824

Spike Millington
Chief Executive, EAAFP
chief@eaaflyway.net
+82 32 458 6509

東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップについて

WSSD（持続可能な開発に関する世界首脳会議/ヨハネスブルクサミット）のリストでは、このパートナーシップが、タイプIIイニシアチブとして採択されました。これは非公式な任意のイニシアチブで、渡り性水鳥、その生息地、およびフライウェイ内でそれらに依存している人々の生活を守ることを目的としています。現在では 15 カ国の政府、4 つの政府間機関、10 の国際的なNGOおよび1つの国際的な民間組織等を含めた 30 のパートナーで構成されています。

より詳しい情報はこちら www.eaaflyway.net

CAFF（北極圏植物相・動物相保存事務局）について

北極評議会の生物多様性作業部会であり、国の代表から構成される CAFF とは、8 カ国の北極評議会加盟国それぞれにより任命された、永続的な会議の参加者でありまた北極評議会オブザーバー国および組織である現地の人々の組織の代表です。CAFF の使命は、北極圏の生物多様性の保全に取り組み、政府と北極圏に住む人々に、北極圏の生活資源の持続可能である実践を促進する手助けをして、その成果を伝えることにあります。

より詳しい情報はこちら www.caff.is [10/06/13]

[\[Resolution of Cooperation between EAAFP and CAFF\]](#)

EAAFP および CAFF の協力決議

[\[Link to article\]](#)記事へのリンク

■ 広報・教育・普及啓発に関する EAAFP-WLI (湿地リンクインターナショナル) 合同ニュースレター発行：

EAAFP および WLI はフライウェイ内の湿地の広報・教育・普及啓発活動に焦点を当てた合同ニュースレター第1号を、2013年9月に発行しました。この発行はEAAFPおよびWLIパートナー間の実践的な湿地の広報・教育・普及啓発活動の経験を共有することを目標としています。

よく知られているように湿地の保全は、国際的な条約、各国の政策及び手引き、そして現地の申し渡しの中で協働することなしでは継続できません。それは、広報・教育・普及啓発がとても重要である継続した活動です。野生動物同様に、人々に恩恵を与える湿地の重要性を地域住民に説得することができなければ、効果的に保全を行うことが難しくなるでしょう。

しかし、現地における取組を成功させることは必ずしも簡単とは限りません。地域住民は、湿地を危険なもの、食物や水の資源、空間の無駄遣いとして捉えることが多く、湿地がどんなものであるのかの知識は少ししかありません。環境と野生生物の保全と同時に地域住民による持続可能な使用をどう行うのか示す方法を見つけることが、非常に重要な活動です。

他の人々にとって広報・教育・普及啓発の成功例によりどれが作用し作用しないかと知ることが大いに役立ちます。どうぞ読んでみて下さい。

[14/08/13]

[\[Link to article\]](#)記事へのリンク

[\[Download the newsletter\]](#)ニュースレターのダウンロード

Rio Tinto - EAAF パートナー

「Rio Tinto」は多国籍の金属採掘会社であり、生物多様性におけるネット・ポジティブ・インパクトの目標を認可する資源業界での最初の会社である。Rio Tinto では、パートナーシップはこの目標を達成するために必要不可欠であり、東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップを含めた多くのリーダー的に始動する環境組織と協力していきます。

Rio Tinto(社)とネット・ポジティブ・インパクトについての詳しい情報はこちら
www.riotinto.com/npj

■ マレーシア、Bako Buntal 湾を EAAF フライウェイサイトネットワークに登録:

マレーシアは 2012 年 11 月に東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ (EAAF) に加入し、2013 年 5 月 15 日に EAAF フライウェイネットワーク湿地として Bako Buntal 湾を指定しました。2013 年 8 月 23 日には EAAF の事務局長であるスパイク・ミリントン氏から正式にネットワーク湿地の登録票が、サラワク森林組合の 10 周年記念の晩餐会においてサラワク市長である Pehin Sri Hj Abdul Taib Mahmud 氏に授与されました。東アジア・オーストラリア地域フライウェイネットワーク内の湿地としてサラワク市長のサインのある Bako Buntal 湾の登録証は、正式にフライウェイ沿いの数多くの渡り性水鳥にとって国際的に重要な非繁殖地として、Bako Buntal 湾を認めるものです。



EAAF チーフエグゼクティブ, Spike Millington 氏から Sarawak 市長, Pehin Sri Abdul Taib Mahmud 氏への登録証の授与

Bako Buntal 湾は、マレーシアのサラワクにある野鳥を指標とした重要生息地の 1 つとして登録されており、水鳥にとって重要な湿地として世界的に貴重です。その生息地は広大で、渡り鳥が海上生活で食物を取り、渡りの間に越冬に立ち寄り休息するのに魅力的な干潟、浅瀬、潮間帯、およびマングローブ林などが豊富にあります。

Bako Buntal 湾は、非常に多くの水鳥の越冬地として重要です。概算で 2 万~2 万 5 千程の個体群から成るシギ・チドリ類の 32 種がこの湾及び周辺にて越冬します。

東アジア・オーストラリア湿地ネットワークとして Bako Buntal 湾を含めることで、絶滅危惧の水鳥の種を保全することを目指しています。幾つかの地球規模の絶滅危惧種や、カラフトアオアシシギ、シベリアオオハシシギ、ホウロクシギ等近い将来の絶滅危惧種はここに立ち寄ります。

マレーシアではどの湿地でもコオバシギやオバシギの数が最大である一方で、カラシラサギの世界の個体数の 10%以上がその周辺にねぐらを持ちます。

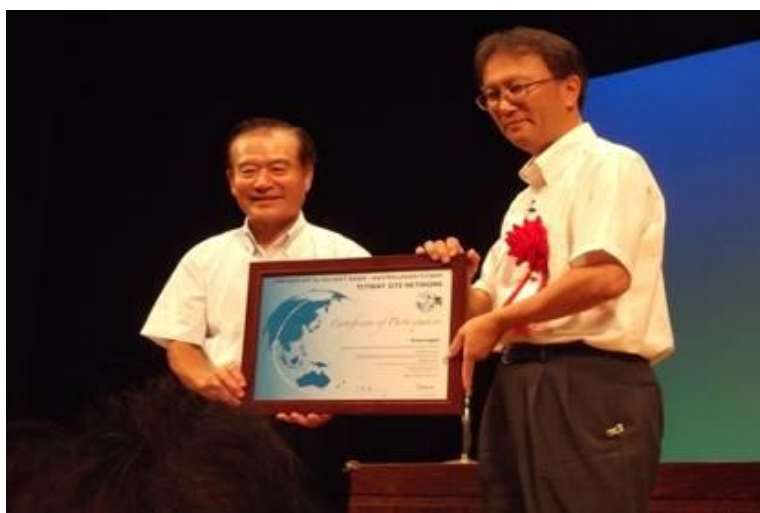
[\[Link to article\]](#)記事へのリンク

■ 日本、荒尾干潟を EAAFP フライウェイネットワークサイトに登録:

EAAFP のフライウェイ生息地ネットワークに登録された荒尾干潟では、6 月 30 日に登録認定証の授与式が開催されました。荒尾干潟は日本の東側にある、単一干潟としては国内で最大の干潟です。この干潟は数多くの国際的に重要な渡り性水鳥を支えていて、渡り性水鳥がその繁殖地と非繁殖地の間を将来にわたって渡っていくために、東アジア・オーストラリア地域フライウェイにおける極めて重要な干潟であると、強く認識されています。



荒尾干潟、フライウェイネットワーク湿地認定証授与式 © 日本環境省



日本の荒尾干潟、フライウェイネットワーク湿地として認定 © 日本環境省

荒尾市では、1000 名ほどの市民やマスコミが集まり湿地登録を祝いました。前畑淳治荒尾市長は、塚本瑞天環境省九州地方環境事務所長より認定証を受け取り、「今まで荒尾市は、荒尾干潟の環境保全と賢明な利用推進に取り組んできました。今回の EAAFP 参加を大変嬉しく思っており、今後も荒尾市のこの価値ある干潟を保全していくため、取組をさらに推進して参りたい。」とのコメントを寄せました。

塚本所長は「日本はこれまでフライウェイサイトネットワークの登録に向けて努力してきたが、このたび登録に至ったことを荒尾市と共に大変慶んでいる。この登録が、EAAFP を通じてフライウェイ沿いの関係国と協力して、荒尾干潟に立ち寄る数多くの渡り鳥、とりわけ国際的な絶滅危惧種の保全が進められていくことを期待する。」と荒尾市の皆さんにメッセージを送りました。

現在、荒尾干潟では、荒尾市民の方々や関係者が定期的に会合を開き、今後の生息地保全や管理、普及啓発について意見交換がなされています。荒尾干潟に関してのより詳しい情報はこちら [EAAFP Site Information Sheet](#) 及び [Ramsar Site](#). [21/08/13]

[\[Link to article\]](#)記事へのリンク

■ EAAFP ヘラシギ特別委員会ニュースレター第 10 号 2013 年 8 月刊行

2013 年 8 月、EAAFP ヘラシギ特別委員会（SBSTF）ニュースレター第 10 号が刊行されました。

ニュースレターには、「Meinypil' gino, Chukotka での順調に育っている新しい 25 羽のヒナ鳥」、「Heritage Expedition 社と共に探したあと 9 カ所の暫定的な繁殖地」、「他の新しい繁殖地見つからず」、「Meinypil' gino, Chukotka での 10~11 の繁殖ペア」、「日本で記録された 542 羽のヘラシギの調査結果」、「昨年春の中国黄海 Bohai 湾での 2 羽のヘラシギ」、「Slimbridge の人工繁殖施設での 28 羽の幸せなヘラシギの成鳥」、「ヘラシギに献金する世界初のヘラシギウェディングでヘラシギ保全のために 1195 ポンドを献金」、等が掲載されています。

[\[download the newsletter\]](#) ニュースレターのダウンロード

[\[Link to article\]](#)記事へのリンク

■ 消えていなくなる？ アカハジロ絶滅寸前

アカハジロは、長い間個体数は多くはないとされ、また実際には各個体群サイズについてはあまりわかっていませんが、かつてアジアにおいて比較的普通に、そして幅広く分布していたカモでした。この種は、鳥のいる場所を訪れ調査をすることの難しさにより鳥類学者に常に見落とされがちでした。また、歴史的記録の正確さの見極めが曖昧だったために、私たちの理解もおぼろげな物でした。

けれども、歴史的なまた最近の曖昧さが残る一方で、間違いなくここ数年この種が悲劇的な減少を経験しており、野生での絶滅の瀬戸際にたっています。保全を行う地域社会からの緊急の対応なしでは、おそらくこの種は近い将来いなくなってしまうでしょう。

今までの莫大な記録は 1910 年、La Touche が中国の河北省の海岸の渡りを「非常に多

く」目撃した時から始まっており、20 世紀後半の現地での渡りの調査では中継の渡りが殆ど確認されませんでした。相当数の減少が 20 世紀に発生しました。「通常の」あるいは「非常に数の多い」ものとして日本や中国（詳細はこちら [Threatened Birds of Asia for full details](#)）に関連した他の数多くの著者によって述べられてきましたが、バングラデッシュ、ミャンマー、タイ等を含めた今までの越冬の範囲のほとんどの国では、数百の個体群の数多いカウントがなされています。

1980 年代後半までに 2 万 5,000 以上の個体数となると考えられていましたが、多分それより少なく、減少しているのが確認され、その結果 1994 年に IUCN レッドリストで絶滅危惧 II 類に付け加えられました。それは絶滅危惧 IB 類とされた 2008 年まで続き、個体が 1,000 の個体数より少ないと強く示唆されたアセスメントを受けて、2012 年に絶滅危惧 I 類とされました。

絶滅危惧の種として登録されて以降、タイやバングラデッシュを含めた越冬地域の南の国々から大幅になくなったと非常に広い範囲で認められた以外、ほとんど新しい情報が明らかになっていません。

最近の状況

改正された現状のアセスメントや、絶滅危惧 I 類へのランクが上がったことを受けて、このアカハジロにより多くの関心が寄せられています。過去 2 年間でアカハジロの現状は、さらに深刻に悪化しています。Wang 他（2012 年版）によれば、2010 年および 2011 年の冬には、揚子江氾濫原の中央に相当数の鳥の群れがいました。—11 月に Hong Hu にて 90 羽、1 月に Liangzi Hu（両方湖北省）にて 131 羽、および 11 月に Wuchang Hu（安徽省）にて 760 羽、2 月に FengSha Hu（安徽省）にて 230 羽。

けれども、過去 2 年間の冬期のアカハジロの記録がほとんど無く、2 桁の個体数がカウントされたのは 2012 年の 11 月に Poyang Hu における 26 羽のみとなりました。2012 年 2013 年の鳥を探す一斉協力を経てもこの数字です。このうち一つは Liangzi Hu での細部調査で幅広く月ごとのカウントを 10 月から 3 月まで行いましたが、2 羽のみ記録されました。それに加えて、できるだけ多くの場所での一斉調査のために幅広い努力がなされ越冬地、特に 2013 年 1 月の中央および下流の揚子江氾濫原で行われました。範囲は不十分であるにせよ、中国では全 40 ほどの湿地で調査が行われ最大で 45 羽が記録されました。バングラデッシュおよびミャンマーの重要な湿地の幾つかでも調査されましたが、1 羽も確認されませんでした。

最近の繁殖記録もさらに少ない数となっています。2012 年には河北省で 1 件の繁殖の試みが行われましたが山東省での 4 組のペアに関するあいまいな記録しかありません。どちらの場所も確認された繁殖地帯の南側であり、その範囲が段階的にはるか南に広がってきているのではないかという興味深い疑問が投げかけられました。2012 年は、Khanka 湖や他のロシアの湿地でいくつかの調査が行われ、8 月に Khanka 湖にて 2 つの個体群が観察されたにもかかわらず、主要な繁殖の範囲（北東中国、およびロシアの隣接する部分）からは繁殖記録が一つも記録されませんでした。2013 年は、さらに調査が進められており、一部は EAAFP により資金提供されています。

わずか 2 年前の最近の生存数からはこれらは程遠いですが、調査中であっても、アカハジロは全体的に見て調査の範囲で見つけることが極めて難しい鳥となっています。Wang 他（2012 年版）で書かれている「世界的な個体数が 1000 個体より少なく、またこの数字よりずっと低い可能性が大きいと危惧している。」ことはほぼ真実と思われ、最近の記録では野生で残っているのは 100 個体より少ないことが確実視されています。

繁殖地における生息地の喪失と退化は数の減少の主な原因とはあまり考えられず、繁殖地は比較的人間の影響を受けることは少なく、情報がほとんど無いことが現状を反映していない間接的な要因となっています。繁殖地の調査及びアセスメントは緊急に必要とされており、2013 年中も実行されています。

アカハジロを含めた多くのアジアのカモが直面する他の脅威は主に、非持続可能な個体の捕獲です。けれども生息地の喪失と退化によりその規模や重要性がどれ程かを数量化するのには最近では難しくなっています。特に中国においては、水鳥の不法な毒殺や、罠で捕獲することが広く行われているために深刻です。

過去には狩猟が深刻な問題となっていました。現在銃の使用は中国において厳しく規制されており、水鳥の捕獲には他の手法が主に使われていると思われます。

個体数減少を引き起こす可能性のある他の脅威も考えられますが、情報がほとんど得られないため他の要因が現地で働いているかどうか確かめるのは現在できません。個体数減少の分析には時間がかかり、実際には既に遅すぎるかもしれません。

私たちができることは何か？

この種（アカハジロ）およびその減少を引き起こす要因に関する知識がなく、私たちが活発な保全の取組を大きく進められることが限られています。越冬及び繁殖期にかかわらず、この種を常に支えているのは知られているだけで 2～3カ所のみであり、そこでの総個体数は少なく、驚く程の割合で減少しています。

確かにアカハジロの個体群の規模と減少率は倍増しており、個体数が安定する時間とのずれで野生での絶滅が切迫しているように思われます。ヘラシギとほぼ同時に、この種は、過去既に少なかった個体数の急激な減少が加速し、保全の対応を進めるのに時間がかかる前に、それがゆるやかなもの（減少）からほぼ絶滅に至ることを意味しています。

アカハジロを救うのに重要となる、中国の中央部の広大な湿地の管理は改善されるとの予想があり、おそらく他の越冬地での管理改善および捕獲行動の著しい減少等は大きな複雑な問題であり、個体群の規模に影響するような問題解決には多くの時間と労力が必要とされています。現在中国では湿地の劣化を緩和し湿地管理を改善する努力がなされており、特別にアカハジロに焦点を当てているわけではありませんが、アカハジロには緊急のきめの細かい管理が既に必要となっているようです。

短期間に何かやるとすれば、この種（アカハジロ）のより詳しい調査と追跡を行うことが出発点です。過去 12 ヶ月の間、アカハジロの生息するところでの努力にもかかわらず、その範囲は完全なものとは言えず、カウントされたより多くの鳥がいる可能性があります。さらに、中央及び下流域の揚子江氾濫源にある越冬地をうまく網羅しても、幾つかの地域はとても広大で、全体をくまなく調査するのはとても難しいです。従ってカウントされていない鳥がかなり多くの数いる可能性が少ないように思えても、調査した場所で発見されていない鳥が何羽か残っていることでしょう。今までいた場所でカウントされる数の少ない他の理由は、個体群の越冬地が多分他の場所に変ったことでしょう。これは北極圏や北の地域で繁殖し温暖な地域で越冬を行う他の渡り性水鳥でも起こる現象として知られており、アカハジロの新しい越冬地は今まで記録された場所よりさらに北になった可能性があります。

アカハジロが 2012 年に繁殖したらしいと思われる場所が、河北省と山東省の 2 カ所にあ

ります。カモ類は管理のあり方に非常に左右されるため、繁殖を行う個体の安全が保障され、繁殖がうまくいくような場所の保全の取組が重要です。この取組には、厳密な地域区分や障害物の最小化、年間を通じての生息地保護、巣の保護、直接の介入による繁殖個体の移動や繁殖個体の促進等が含まれます。

世界的なアカハジロの人工繁殖個体は結構多くいます。けれども、解決すべき大切なことは人工繁殖個体の遺伝的純正さを保つことで、以前考えられていたよりもずっと少ない鳥が人工繁殖プログラムに係わっているため、懸念材料が残ります。

したがって、アカハジロの直面している状況は現在明らかに悪化していますが、実際にこの種に何が起ころうとも、苦境からのはっきりしたメッセージに注意する必要があります。アカハジロを野生での絶滅から救うのに既に遅すぎて不可能かもしれませんが、この件がアジアの水鳥個体群やそれを支える湿地の健全さについて、間違いなく別の強い警告をしています。最近では、東アジア-オーストラリア地域フライウェイ内のシギ・チドリ類個体群や潮間の生息地について多くのことが言われており、ヘラシギの苦境によって強調されています。けれどもアカハジロが語ることは、多くのカモ類などの内陸の淡水種にとっても深刻な状況です。

2013年6月のアラスカでのEAAFPパートナー会議において専門家が集い、アカハジロ専門委員会の今後の発展について考え、その保全に関する行動計画を作成します。この種が救われるはっきりとした直接行動を早急におこなう必要があります。[31/05/13]

[\[Link to Baer's Pochard Page\]](#) アカハジロのページへのリンク

[\[Link to article\]](#) 記事へのリンク

関連ニュース

■ 貴重な光景、標識を付けたヘラシギの渡りの様子:



Rudong 干潟での「ライム01」 © Michelle and Peter Wong

上海の北部 Rudong 干潟より先週末、標識を付けたヘラシギの渡りの貴重な様子が報告されました。

今年の夏、繁殖地であるロシアで、鳥の科学者によってライムグリーンのプラスチックの「01」とマークされている標識を付けられた、非常に危機的状況にあるこの鳥が確認されました。

保全に係わる人々はこの「ライム01」は、今年の夏巣だった6羽の父親で、そのうち3羽は人工的に育てられ、また別の3羽はライム01によって育てられましたが、これはこの種の平均の10倍に当たるということを知っています。

今年の夏は、16羽のヘラシギのヒナが育てられ、8羽の成鳥が独特の記載をしたプラスチックの足標識が付けられました。バードウォッチャーは、ヘラシギの全ての確認結果を報告するように求められています。

ヘラシギ特別委員会のコーディネーターである Christoph Zöckler 氏は次のように語っています。

「Rudong 干潟は、ヘラシギが羽を休め食べ物を採るとも重要な渡りの中継地です。ロシアで繁殖した鳥がその地で目撃されたことは、とてもわくわくするニュースです。残念ながら、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ沿いの湿地のように、これらの

干潟は開発の脅威にさらされています。さらに不法な罟や狩猟が、この種を瀬戸際に追い込んでいます。」

水禽湿地トラストの、種保存部長である Baz Hughes 氏も次のように語っています。

「これこそ、絶滅の危機を避けるために特別な手段を取っている理由です。人工的に育てたヒナの数が増えてもヘラシギの絶滅回避は多くの人の助けに頼っているからです。こうした報告はアジア中のバードウォッチャーのサポートによってのみ可能で、そしてこうした報告は本種の保全における非常に重要なことの1つであります。」

Rudong 干潟は中国で最も重要なヘラシギの渡りの中継地として知られており、昨年10月に106個体がカウントされました。上陸するのは上海からたった150km程離れた場所が多く、この土地は Dongling の沼地から南の端まで既に埋め立てられています。



© Michelle and Peter Wong

Birds Russia の Pavel Tomkovich 氏は、Nikolai Yakushev 氏と鳥を捕獲し標識を付けていますが次のように語っています。

「「ライム01」の標識を付けた時、誰かが渡りの途中で見つけてくれるかどうか心配でした。それは世界1周の4分の1にあたり、ヘラシギを見つけることは乾し草の山から針を見つけるようなものです。このような特殊な標識を8羽の成鳥にしか装着できなかったので、標識を付けた鳥を探すことはさらに難しいです。ヘラシギの中継地を知ることができているので現地のバードウォッチャーに感謝します。」

「ライム01」(装着鳥)は8月4日に繁殖地を離れるのが確認され、8月31日に5,000km離れた Rudong 干潟で観察されました。ヘラシギは、1日に1,000kmほど渡ることができ、約3週間にわたりどこかに立ち寄ります。

BTO (英国鳥類学協会) プロジェクト長の Nigel Clark 氏は語っています。

「数年にわたり Rudong 干潟に立ち寄ることは知っていましたが、その保全を願っていました。私たちの予測では「ライム 01」は Rudong 干潟に達するまでの 3 週間どこか他の所に立ち寄るだろうと考えていました。その場所が脅威にさらされているなら、どこか特定したいと思っています。」

中国のヘラシギチームの Zhang Lin 氏も、次のように語っています。

「ヘラシギは約 2 週間前に Rudong 干潟に到着しましたが、それ以来私は定期的に、Rudong 干潟での満潮時の寝床で水鳥が増え続ける数を調査しています。8 月 31 日に 1 羽の個体を見かけた時にそれはライムグリーンの足標識に似ており、目の前で起こっていることに何か興奮を覚えました。より拡大で調査してみると「ライム 01」だとわかりました。2013 年に標識を付けられた鳥の 1 羽が中国で見つかった最初の出来事だったので大喜びしました。」

「このように非常に大きな危機に瀕している小さな鳥が、ロシアと中国を結ぶフライウェイ沿いの重要な湿地とどうつながっているのかわかるのは驚異的なことです。その情報は、ヘラシギを救う努力が機能しているかどうか追跡できるためとても重要です。」

ヘラシギ観察報告についての手引きはこちらから入手可能

[East-Asian Australasian Flyway Partnership Spoon-billed Sandpiper Task Force.](#)

ヘラシギの保全繁殖プログラムの進捗状況確認にはこちら

[Saving the Spoon-billed Sandpiper](#)

[[Link to article](#)]記事へのリンク

■ ヘラシギ、保全に関わる人々により数が回復

非常に危機に瀕しているヘラシギの若鳥は、ヒナを人工的に育てて保全に取り組んだ結果 2013 年の上半期で増加しています。

野生には 100 組の繁殖ペアがいるのみで毎年平均 60 羽の若鳥が育っています。人工飼育の追加の 16 羽が絶滅の瀬戸際にあるこの種の回復を後押ししています。

水禽湿地トラストの保全繁殖オフィサーである Roland Digby 氏はこう語っています。

「ロシアの繁殖時期は短く、ヘラシギにとっては過酷です。つがいは 1 羽さえ巣立ちをさせることができれば幸運な方です。通常はそれが生きるということですが、今はヘラシギは減少を止めるため、命綱を必要としています。」

水禽湿地トラストの専門家はロシアの科学者と共同で、繁殖ペアが卵を抱えた直後に彼らから卵を確保します。卵を取り上げることで放棄された卵を再び繁殖ペアがしっかりと抱くように促します。今年は一組の繁殖ペアから全部で 6 羽の若鳥が巣立ち、これは平均の 10 倍に当たります。

小さな若鳥は今、ミャンマーやバングラデッシュに向けた初めての 8,000km におよぶ渡りの最中です。途中で羽を休め食物を取るために未開の沿岸干潟を苦勞して見つけ、到着できても網で捕獲される危険があります。

アジアのバードウォッチャーからの話はこちら

[to report any sightings of spoon-billed sandpipers.](#)

全ての人工的に育てられた鳥は、小さなカラー標識を片方の足に装着しています。
このような野生の繁殖の生産性を上げる取組は、積極的に行われている短期の戦略です。



人工的に育てられたヘラシギの若鳥 © Nicky Hiscock



このオスのヘラシギから全部で6羽の巣立ち鳥が生まれました。：3羽は自分で育て、残りの3羽は人工的に育てられました。 © Roland Digby

RSPB（英国王立鳥類保護協会）の国際部長である Tim Stowe 氏は、語っています。

「他のヘラシギの繁殖地を探しに遠征してみて、積極的に人間による鳥への驚嘆すべき援助が短期間の保全に助けになっていることに感謝します。」

保全に関わる人々は、ヘラシギのフライウェイ沿いの違法捕獲と生息地の喪失の問題に取り組んでいます。積極的な取組により、繁殖に戻ってくる個体数が増加し個体群が安定し、より迅速に回復すると予測しています。

SOS(Save Our Species)の Director である Jean-Christophe Vié 氏は継続しているプロジェクトの成功を歓迎しこう述べています。

「SOS(Save Our Species)にとって、このプロジェクトを支えることは喜ばしいことです。積極的に進めていたプログラムは既に 2012 年に意味のある結果を残しており、この Chukotka に重点をおいている追加的孵化が影響を与えたこのニュースで、今後のヘラシギに希望が出てきました。現地のベテランのチームだけでなく、しばしば世界中のあちこちで奮闘している無名のヒーローたちに報いるニュースです。」

Chukotka 遠征時および、ヘラシギ保全をどのように支えているかの詳細の報告についてはこちら www.saving-spoon-billed-sandpiper.com .

ヘラシギ保全繁殖プログラムは、WWT (水鳥湿地トラスト)、Birds Russia、モスクワ動物園 及び BTO (英国鳥類学協会) からの職員と協力した RSPB (英国王立鳥類保護協会)、バードライフ インターナショナル、ArcGona、およびヘラシギ特別委員会の間での協力で行われています。

資料[[Source: Saving the Spoon-billed Sandpiper](#)]

[[Link to article](#)]記事へのリンク

■ ヘラシギ救済アニメに500人の子供が参加:



このプロジェクトにはヘラシギの渡りのルート沿いの 12 の地域、8 カ国から (ロシア、韓国、日本、中国の江蘇省と福建省、ベトナム、タイ、ミャンマーおよびバングラデッ

シュ) から 500 人の子供達とヘルパーが参加しました。子供達はアニメのセル画 1,200 枚の色づけを 1 枚ずつ手伝いました。このプロジェクト全体の製作には約 8 ヶ月かかりました。アニメの終わりに子供達が各国語で呼びかけるビデオクリップ「ヘラシギを救おう！」が流れます。

このプロジェクトには、Eric Hosking 慈善基金がスポンサーになりました。また、バードライフ・インターナショナルの中国プログラムおよび香港バードウォッチング協会等が調整を行い、Birds Russia、Birds Korea、日本野鳥の会 (WBSJ)、福建省バードウォッチング協会、Viet Nature Conservation、タイ鳥類保全協会 (BCST)、生物多様性自然保全協会 (BANCA) およびバングラデッシュヘラシギ保全プロジェクト等が参加しました。

[\[Link to video and article\]](#) ビデオ、記事にリンク

■ Guwayi (ヤウル語でオオソリハシシギ)、シギ・チドリ類、科学と文化で追跡

YAWURU オーストラリア、ヤウル語の語学教師である Maxine Charlie 女史は子供の頃家族でキャンプに行った時、Roebuck 湾の前浜でオオソリハシシギの大群の飛行を見たことを覚えています。



最近刊行された Guwayi (オオソリハシシギ) を手にするヤウル語の語学教師 Maxine Charlie 女史 画像提供: Kandy Curran

当時は、この鳥がシベリアと Roebuck 湾の間の片道 1 万キロにも及ぶ距離を渡るとは知りませんでした。ヤウル語が Broome で将来にわたって使われ広く通用することを切望して、Maxine 女史はこのようなヤウル語の名前を持つ驚くべき世界的な渡り鳥について本を書こうと決心しました。

「子供達がこの美しい特別なヤウル語の名前、Guwayi を持った鳥や、その毎年世界を信じられないほど飛行することについて学べるような小さなドキュメンタリーを書こうと思いました。」と Maxine Charlie 女史は語っています。

この子供のための本には、Guwayi の渡り、羽毛、Roebuck 湾の干潟および雪解けの北極圏ツンドラ上の営巢の生息地や食物資源等について書かれています。17 年間にわたり Broome にてグローバルフライウェイネットワーク (GFN) およびオーストラリア水鳥研

究グループ（AWSG）と共に熱心にシギ・チドリ類を研究してきた Chris Hassell 氏は、Broome 鳥類観測所より刊行された子供のための本に興味を持ちました。

「この本はオオソリハシシギの文化的側面についての本というだけでなく科学的側面についても書かれた本です。」「この文化と科学の美しい融合は滅多に見られるものではなく、こんなに美しい融合を見るのは私にとって大きな喜びでしたし、わずかでも係われたのは特別なことでした。」と Hassell 氏は語っています。

オオソリハシシギはサイズから特定がし易い種の 1 つで、鳥類学的グループの調査の対象となっている種です。この調査は、鳥類学的理解を深め、その保全の助けになるような鳥の渡りのパターンやその生息に関する貴重な情報を提供しています。

Hassell 氏はまたこう語っています。

「彼らは本当に、渡り鳥のチャンピオンです。Roebuck 湾を離れる際には、6,500km を 4 日かけてノンストップで渡り、その間食べ物も採らず、眠りもせず、水も飲まない、中国の海洋、黄海まで直接一気に飛んでいきます。」

鳥類学研究者達は数年にわたり Roebuck 湾沿いで、生物学的データを集め個別に金属標識やプラスチックの足環を装着するためにオオソリハシシギを捕獲し放鳥しています。足環には、鳥が東アジア・オーストラリア地域フライウェイ沿いで認識される様に渡りのデータがついています。最新の技術も用いられており、「私達は手術をして鳥の体内に衛星の発信器を装着して大自然へ戻し、渡りを衛星追跡します。」と、Hassell 氏は説明します。

「北方への渡りのタイミングは重要で、その飛行は黄海まで直行し東シベリアの Yakutia に向かいますが、帰りは、直接に戻るもの、フィリピンで立ち寄るもの、インドネシアやボルネオで立ち寄るものなど、様々です。」「非繁殖地に帰るのは時間制限が少ないため、少しずつ帰るよう（行きとは）区別しています。そのような情報は鳥に装着した金属の足環か、衛星を用いた最新の先端技術からきています。」

鳥類学者による調査で現在進行中なのはオオソリハシシギとその他のシギ・チドリ類で、彼らは捕獲し、計測し、足環を装着し、放鳥して、その渡りのパターンや生存率についてより理解を深めてもらう努力をしています。グローバルフライウェイネットワーク（GFN）およびオーストラリア水鳥研究グループ（AWSG）からの興味深いデータは、カラーリングプロジェクトから入手でき、成鳥したオオソリハシシギが翌年まで生存するチャンスは 86%に達していることがわかっています。

この調査からの知見は、これらの驚異的な渡り鳥の今後の生存のためにとっても重要で、また Maxin（女史）のような Yawuru の人々にとって、幼少期の早い段階でこれらの鳥に関して抱く好奇心を満足させるのに役立っています。

[05/09/13]

これは Roebuck 湾作業部会の Kandy Curran によるグループによる寄稿でした。

資料[[Source: ScienceNetwork Western Australia](#)]

[[Link to article](#)]記事へのリンク

■ 北極圏生物多様性アセスメント（ABA）－ 渡り性の鳥類:



© ABA



© ABA

2013年5月15日、北極圏植物相・動物相保温事務局（CAFF）、北極圏生物多様性アセスメント（ABA）の作業部会では、北極圏生物多様性の現状と傾向に関する伝統的生態学情報 traditional ecological knowledge より発信された最新の入手可能な科学情報とそれに付随する生物多様性保全のために推奨される政策に関する報告書「Arctic Biodiversity Assessment（北極圏生物多様性アセスメント）」を発行しました。

ダウンロードはこちら www.arcticbiodiversity.is

渡り性の種:

北極圏では何百万という渡り性の鳥が繁殖し、毎年地球の南方へと渡りを行います。東アジア・オーストラリア地域フライウェイでは、緯度の高い北極圏で60種を超える渡り性の水鳥の繁殖を支えており、これには絶滅危惧IA類のソデグロツルやヘラシギも含まれます。さらに東アジア・オーストラリア地域フライウェイでは、他のフライウェイよりも絶滅危惧種を多く支えており、またその多くは北極圏で繁殖するシギ・チドリ類です。ABA（北極圏生物多様性アセスメント）で重要な情報は、多くの北極圏の渡り性の種は、北極圏外、特に東アジア・オーストラリア地域フライウェイ沿いでの、生息地喪失及び変化の脅威にさらされています。

ヘラシギは、東南アジアの越冬地での過剰な狩猟によって、切迫した絶滅の危機に直面しています。この種やその他の種の別の深刻な脅威は渡りの中継地と越冬の生息地がなくなりつつあることで、ここ数年多くの地域特に東アジアの黄海においてそれは警戒す

べき割合に達しています。沿岸域や潮間の生息地の喪失は、海面上昇および加速する開発により、かなり増加することが予想されます。

渡り性の種は年間を通じて国境を越えた渡り経路全てに係る保全を必要とします。一つの地域における効果的な管理が、どこか他の場所の有害な行動によりだめになってしまうことがあります。渡り性の種に必要とされる生息地や、汚染物質の長距離移動、世界的な大洋航路や生態系の地理（分布）等は政策的な境界線に従うことはありません。北極圏の生物多様性が現在及び10年以内に直面する挑戦に徹底的に取り組むには、国際的な協力が必要とされています。渡り鳥保全は、生態系と生物多様性全体に非常に重要な世界的問題です。

ABA(北極圏生物多様性アセスメント)では、フライウェイやその他の渡りのルート沿いの越冬地および中継地における生息地の劣化と過剰な狩猟を含めた、全地域の渡り性の種のストレス因子を減らすことに焦点を置くことを勧めています。

特に、ABAで勧めているのは以下です。

- a. 東アジア・オーストラリア地域フライウェイを特に優先した北極圏および非北極圏の国々の間のフライウェイレベルでの正式な渡り鳥に関する共同協力やその他の特定の取組を推進し強化すること。
- b. 適正な保全の取組を特定し実践するために、北極圏の渡り性の種の保全の利益を共有する当該国際委員会、条約、ネットワークおよび他の組織と協力すること。
- c. 当該非北極圏の国々および団体を、絶滅危惧種の共同管理及び回復計画を開発し、実行すること。
- d. 渡り性の鳥の重要な越冬地及び中継地、特に湿地を特定し、その保全を進めること。

[16/05/13]

[\[Download Press Release\]](#) プレスリリースのダウンロード

[\[Link to article\]](#) 記事にリンク

■ 東南アジアの公園管理者、フィリピンの Tagaytay で生物多様性会議を開催



Tagaytay © Global Nation

フィリピン、マニラーフィリピンは10月の第1週に行われる、保護区域の生物多様性とその持続可能な管理に取り組むための地域的な対話である第4回のASEAN（東南アジア諸国連合）遺産公園会議を主催します。

会議はTagaytay市で10月1日～4日までの4日間行われ、環境大臣は生物多様性ASEANセンターの主導によりフィリピン環境天然資源部が主催すると発表しました。

ASEAN諸国から、生物多様性の専門家、公園管理者、政策決定者、科学者、NGOの代表、地域の共同体の代表約300名が出席すると見込まれています。

記者発表で生物多様性ASEANセンターのディレクターであるRoberto V. Oliva氏が語るように、会議では出席者に生物多様性の喪失、生態系の劣化、ASEANの自然遺産の保存に取り組むための最新の情報およびツールを提供します。

この対話では、第11回の生物多様性締約国会議の成果にかかわる生物多様性から2010年の日本の名古屋でのいわゆる愛知生物多様性ターゲット達成への事柄を、網羅する予定です。

このASEAN遺産公園会議3年ごとに開催されています。第1回は2004年のタイ、第2回は2007年にマレーシアで、また第3回は2010年にブルネイで開かれました。

環境天然資源部では、次のように伝えています。

「この会合では、公園管理者、政策決定者、自然保護者、科学者や、現地の利害関係者にASEANの遺産公園や他の保護区域の管理についての最良の実践と授業を提供します。」

会議のサイドイベントとして、最も新しくASEANの遺産公園になったMakiling山森林保護区を訪れる予定にしています。

今までに、東南アジアには33のASEAN遺産公園があり、そのうちの5つはフィリピン国内で、ミンダナオ島のApo山自然公園、Kitanglad山周辺自然公園、Malindang山周辺自然公園、ミンドロ島のIglit-Baco山、およびMakiling山森林保護区等です。

[\[Link to article\]](#)記事にリンク

■ Birds Korea Birdathon 2013年5月11～12日に開催:

Bird Korea Birdathonは、毎年行われる会員、非会員、専門家、バードウォッチング初心者向けのチャリティーのバードウォッチングです。(2011年Birds Korea世界渡り鳥デーBirdathon、2011年Birds Korea世界渡り鳥デーBirdathon報告、第2回世界渡り鳥デーBirdathonおよび第2回世界渡り鳥デーBirdathon開催イベント報告等、ご参照下さい。)

ネットワークというテーマの今年の世界バードウォッチングデーの中で、集まったお金は、コーネル大学の鳥類学研究所との共同プロジェクトであるヘラシギの保全に関する短編ドキュメンタリー作成、私たちのフライウェイのネットワーク、そして最長の渡りを行う数種の夏の生息地である北米における保全活動を充実させるのに役に立てられます。

詳しくはこちら:

- [In English](#) 英語版
- [In Korean](#) 韓国語版

[\[Link to article\]](#)記事にリンク